

著者紹介

1945年東京生れ。鳥羽商船高校卒業後、日本海汽船入社。以後、航海士として外国航路に従事し、世界各国に就航。現在、ジャパン・マリーナKKに所属。一等航海士。



マラッカ海峡

昭和52年4月25日 初版発行

著者 ^{たに}谷 ^{こうせい}恒生 〈検印省略〉

発行者 岩瀬順三

発行所 KKベストセラーズ

〒101 東京都千代田区神田神保町2の10

電話 東京 (263) 9121 代表

振替 東京 8-103083

印刷 東京ベル印刷

製本 ナショナル製本

0293-511167-7617

ベストセラー・ノベルズ

追跡サスペンス★書下ろし長編

マラッカ海峡

たに こうせい
谷 恒生



本文イラストレーション

滝瀬源一

マラッカ海峡 目次

5	第一章	甦る
75	第二章	過去の呼び声
133	第三章	追う
187	第四章	星（シンガポール）港
255	第五章	マラッカの伝説



第一章 甦る

退潮時なのだろう。繫留^{けいりゅう}された貨物船の舷側が次第に浮き上がる。岸壁のビットと船首尾をつないだ太い繫船^{けいせん}索^{さく}が鈍い音を立てて軋^{きし}む。

うす闇が港内にはびこりだした。海面が湿気の強い風にあおられて、毛羽立っている。

港にひしめき合う碇泊船の間を駆けまわる交通艇やはしけが、吹きつける風の鋭い切っ先を受けて揺れ動く。

空を層雲が厚く覆い、暗い防波堤の沖で、海が明日の時化^{しけ}を暗示するように重くどよめいている。

汽笛が野太く震え、貨物船が前後に曳船^{タシボート}を従えて横浜港内防波堤を通過してくる。

パッセージの手すりにもたれていた男が、すぐ傍を緩慢に移動する入港船にえぐるような一瞥^{いちべつ}を投げた。きたらしい錆びが、舷側のいたるところで瘡蓋^{かさぶた}のように盛り上がった老朽貨物船、チギリス号の居住区^{ヘックス}である。

男は、闇へ融ける入港船をぞんざいに眼で追いながら、から咳を二度ばかりした。長い時間、二月の風に吹きさらされていたせいか、唇が暗紫色に変わり、そげた頬を疲労がどす黒く這いまわっている。

黒い綿シャツの上に、擦り切れたらくだ皮のコートをはおり、厚手のデニムのズボンと表面に塩のふいた半長靴をはいていた。伸び放題の髪の間から覗く眼が印象的だ。その死肉を貪る禿鷹^{はげたか}のような眼に射すくめられると、人は例外なく異様なおぞましさを覚え、思わず視線を避けてしまう。

男はまた軽く咳込んだ。ところどころメッキの剥げた手巻きの腕時計を覗くと、足元に置いてあるよく使いこまれた革トランクを無造作に掴んだ。



碇泊船の群れに灯が点き始めた。灯火は暗い港にぼんやり滲み、沖の濃い闇へ吹い込まれるように消えてゆく。

「へい、ビック」

舷門の手すりにだらしなく頼づえをついたフィリピン人の若い当直操舵手が、近づいてくる男を呼びとめた。

「今夜は、日本女の深さを測深サウンディングかよ」

「シドコ、五日間頼むぜ。出帆前には帰るからな」

男は伝法な英語で答え、操舵手の肩を拳で軽く叩いた。

「日本女の味は全くだまらねえよな。高だけあるさ」

操舵手は、そういつて、片眼をつぶった。

「じゃあな、船長おやじには内証だぜ」

男は操舵手の掌にすばやく五ドル札を握らせると、すぐさま、急角度で岸壁に降りた金属タラップを駆け降りていった。

「骨抜きにされずに戻ってこいよ」

操舵手が舷側から乗り出し、男の頑丈な背中に向かってわめいた。

一万二千総トンの不定期貨物船チグリス号。船籍港がリベリア、船主はギリシア人である。船長はもちろん、高級船員のすべてがヨーロッパ人、一般の乗組員はフィリピン人で、日本人は一人も含まれていないはずであった。しかし、革トランクを下げて岸壁づたいに歩く男の相貌は、まぎれもなく日本人の顔であった。

今夜半積み切り後、出帆を控えた貨物船の甲板に、あかあかと光が溜まっている。デリックブームが唸り、吊りワイヤーに掛けられた木箱が空中高く吊り上げられて、次々と船艙に積み込まれてゆく。ウインチ音が響き、

荷役人夫たちの怒鳴り声が飛び交う。岸壁を埋めたおびただしい荷役の間を縫ってホークリフトが走りまわり、夜の埠頭には出帆直前のあわただしい活気がみなぎっている。

男は、繫留船を過ぎたところで立ち止まり、港へ突き出した船首を見上げた。口の中で何ごとか呟き、風に震えるコートの襟を左手で押さえ、顎を引き締めて埠頭の通関ゲイトへ歩き始めた。

すでに岸壁の騒音は遠く、一定の歩調で歩く男の踵の鋲が、闇に沈んだあたりに甲高く反響する。シャッターを降ろした巨大なブロック造りの倉庫に風が碎け、金切り声を張り上げて吹き抜けてゆく。

男は税関ゲイトなど振り向きもせず、そのまま通り過ぎようとした。あわてて飛び出してきた制服の若い税関吏が、袖を掴んで男の足を止めた。男は、腕をひと振りして税関吏の手を払いのけると、じろりと睨み据えた。底冷えのするような眼だった。

男は、一呼吸置いて、ひどく濁った声で訊いた。

「何か用か」

「はあ、いや」税関吏はへどもどしながら「乗組員の方でしょうか」

「そうだ、山梨丸」

男は途中で確認した船名を短く告げると、税関ゲイトをさきほどと変わらぬ歩調で行き過ぎてゆく。税関吏は男のトランクを調べることも忘れ、悪寒^{おかん}を背筋に感じながら、遠ざかる男の後姿を見送った。

海岸通りは、冬のためか人通りがまばらだった。夏のかき入れ時になると通りにひしめく屋台も、季節外れのいまは、おでんとかラーメンの屋台がちらほら寒そうに灯をともしているばかりだ。石畳に散った枯葉が風になぶられ、かすれ音を鳴らして宙に舞う。人影のない山下公園で、樹木が暗くざわめいている。マリントワーの白

と緑の閃光が、港に澱んだ闇を一定間隔で薙ぐ。錨を降ろした沖の船の碇泊灯が暗い空間に漁火のように点々と連らなる。

男は、石畳に靴音を響かせてもの寂しい海岸通りを抜け、大棧橋の向かいの角を占領したシーサイドホテルに入った。

ロビーは、やけに明るく、よそよそしい静けさに充ちている。ソファに腰を据えた待合客たちは、煙草をふかしたり新聞や雑誌を広げたりして時間をつぶしていた。

男は、暗がりに馴れた眼を幾度もしばたたかせながらロビーを見まわし、フロントの隣に設けられたマネーチェンジのコーナーへゆっくり歩み寄った。

「両替えを頼む」

係の女にスペイン語がかった発音の英語でいい、皮コートの内ポケットからドルの札束と船員手帳シイメンズ・ブックを掴みだした。女子係員がにこやかに頷き、替金証明のチケットを差し出す。男は、姓名、国籍、船名その他を記入した。

ビセンテ・タビデュラン、国籍はフィリピンである。

「三千四百五十二ドルですね」

女子係員は確認をとると、百二万千七百九十二円を受け皿に乗せた。男は数えもせずに札束をポケットにねじ込んだ。売店で両切りピースを二個買い、ロビーの隅にぽつんと空いたソファに身体を沈めると、ピースの底を親指で押し、銀紙を破って匂いを懐しそうに嗅いだ。一瞬、男の顔を覆う陰惨な翳が消え、優しい微笑が口の端に浮かんだ。ピースの端で親指の爪を軽く叩いてくわえ、銀のライターで火をつける。肺の奥に深く吸い込み、瞳孔をすぼめて囁むようにゆっくり吐き流す。それは、長く外国で暮した日本人が久し振りで日本の煙草をくゆ

らす、うれしげなあの表情にちがいがなかった。

男は時間をかけてピースを喫い終えると、革トランクをその場に置いてフロントへ行った。部屋を五日間予約し、顔に皮肉な笑みを刻みながら宿泊者名簿に姓名、住所、職業を記入した。

あいさきでつ
相崎哲、港区南青山四の六、ルポライター。

キーマスターから部屋鍵を受け取ると、ボーイに案内されて部屋へ入った。丁寧に整理された清潔な部屋を満足そうに眺め、ボーイにチップを握らせた。ボーイが去つてももの一分と経たないうちに、男はそそくさと部屋を出た。ロビーに戻り、置きっぱなしの革トランクをさげると、裏玄関から街路へ飛び出した。

マリントワーの脇を抜け、毒々しいネオンのチャイナタウンを素通りし、関内から伊勢佐木町のごみごみした雑踏へ紛れ込む。

男は人混みを、くわえ煙草で歩く。行き会う人々はなにげなく男と視線が合うと、け気おされたように道をよけてしまう。

彼は伊勢佐木町から路地へ入り、福富町、日の出町と一気に駆け抜け、運河に沿ってたむろする淫靡いんぴな連れ込み売春宿のひとつに融け消えた。

「部屋はね、いっぱいだよ」

帳場の覗き窓ががさつに開いて、毛をむしられた軍鶏いづものようにぎすぎすした六十がらみの女が顔を突き出した。

「駄目駄目、お断りだ」

女はとりつくしまもなく断り、上眼づかいに男を見た。化粧焼けした顔が、みるみる引き攣り、喉で鶏の締められるような音が鳴った。

「相変わらずだな、おきよ婆さん」

男は落ち窪んだ眼窩の底に親しげな微笑を溜めた。

十秒ばかり経った。おきよ婆さんは、自分にいいきかせるように呟いた。

「生きてたんだね、雷ちゃん」

「上がるぜ」

男は玄関からのっそり帳場へ入った。

「まず、お茶が欲しいな、話はそれからだ」

おきよ婆さんがお茶を注いだ湯呑みを両手で握り込み、眼をなごませてすする。

「本当に無事だったんだね」

「まさか、幽霊でもないだろうさ」

おきよ婆さんの皺だらけの眼が、うるんでいるように見えた。どぶ泥のような運河べりに三十年も巣喰い、横浜の暗い裏側を知りつくしている老婆が、異常なほど感激している。

「疲れたろう」

「まあな」男は鼻毛をむしった。「一年間、気の休まる日は一日もなかった。三度殺されかけたよ。生命があるのが不思議なくらいだ。とんでもない連中を敵にまわしたものだ」

「どんなやつらだい、力を貸そうじゃないか」

おきよ婆さんが勢い込んで身を乗り出した。

「婆さんの手には負えん」男は尖がった顎に頑丈な掌を当てた。「執念深くて陰険で、まったく蛇みたいな連中だぜ。たぶん、いまでも尾行^{つかけ}られた。伊勢佐木町でどうにかまいたが、油断は禁物だ」

「お寿司でも取ろうか」

「寿司か」

男はお茶を呑み干し、射るような眼つきで訊いた。

「順平の消息が判るか」

「船食屋で真面目に働いてるよ、高島町に事務所がある川田シップチャンドラーさ」

おきよ婆さんは寿司屋のダイヤルをまわし、極上を四人前、注文した。

「明日にでも会いたいんだが」

「いいよ、手筈を整えてあげる。それより雷ちゃん、どうだい女は。とびきりの娘を世話しようじゃないか」

「女か」男はぶっきら棒にいった。「女に会うために戻ってきたのさ」

「暑いねえ」

おきよ婆さんは、足元の石油ストーブを弱め、手拭いで顔を拭いた。ストーブの上のやかんがしゃんしゃん湯気を噴き上げている。

「日本の冬は寒いぜ、心臓が凍りつくようだ」

「どうした経緯^{いきさつ}で甦^{よみがえ}ったんだい」

婆さんが遠慮がちにおずおず切り出した。

男は、遠くでも見るように凝然と宙を眺めた。にわかに瞳孔が凶暴にひらめき、こめかみが小刻みに震えだした。ふっと押し黙り、いくばくか経^たって自嘲気味に呟いた。怒りを、冗談めかして喋ることによって抑えたのかも知れない。

「くたばりぞこないとはよくいったものだ。マラッカの真ん中で、たっぷり十時間浮いていたんだからな。海の底には仲間が四十二人眠ってやがるし、気色が悪いったらなかったぜ。通りすがりのジャンクが拾ってくれなけりゃ、俺も仲間と一緒に饑^うの餌だった。クーニャンがかいがいしく介抱してくれてな。おかげで俺は生命^{いのち}を吹き返した」

「でも、どうして追われてるんだい。まさか遭難がきな臭かったんじゃ……」

「訊かないことだ」男は威圧をこめていった。「それより、雅代と夏江の消息を教えてください」

だしぬけに裏の通用口が開いた。男が反射的に身構えた。寿司屋の出前持ちが亀のように首を突き出し、間の抜けた笑いを浮かべた。

「声ぐらいかけたらどうだい、このでくの棒」

おきよ婆さんが血相を変えて怒鳴りつけ、寿司桶をひったくった。出前持ちの小僧がおどおど戸を閉めた。

「雅代は新しく店を出したよ。前のところをたたんでさ。サパークラブとかいうんだろ。わりに気のきいた店で、この不景気にけっこう繁盛してるよ。福富町の山田ビル知ってるかい。そこにある『スバル』って店」

男は次から次とがつつが寿司をほうばる。飢えた痩せ犬が腐肉を食いあさるようなまなましさだ。

「あんた、夏江への未練を捨てな」

おきよ婆さんはあっさりといった。彼は寿司桶に覆いかぶさって食っている。

「夏江、再婚しちゃったよ」

「相手は相崎だろ」男はこともなげに答えた。「ちゃんと計算済みだ」

「違うね、毛唐だって噂さ」

「毛唐……」

男は寿司桶から顔を上げた。口の罅りにこびりついた醬油が、凝結した血糊のように見えた。

「毛唐かい」

男は含み笑い、湯呑みにやかんの煮えたぎった湯を注ぎ、ぐいと飲みくだした。

「とんだかすみ網だが、かすみ網ぐらいずたずたに引き裂いてやる」

男はしばらく血に飢えた獣のような眼で宙の一角を睨み据えていたが、ふと思い出したようにトランクを開け、巧妙に仕込んだ二重底から油紙で丁寧に包んだ品物を、大事そうに取り出した。包みの中から鋼色はがねの艶を帯びた拳銃が現われた。銃身に消音器が取り付けられている。

男は拳銃をいとしそうに握り、得意気にいった。

「ルガー三十二口径、とびきり上物だ」

「引き取るのかい」

婆さんは眉一本動かさずに訊いた。

「いや、あんたの土産みやげはこっちだ」

男はトランクの底から同じくらしい包みを掴み出して、おきよ婆さんの膝に乗せた。

「最高級マリファナ、ブッダスティックだ」